



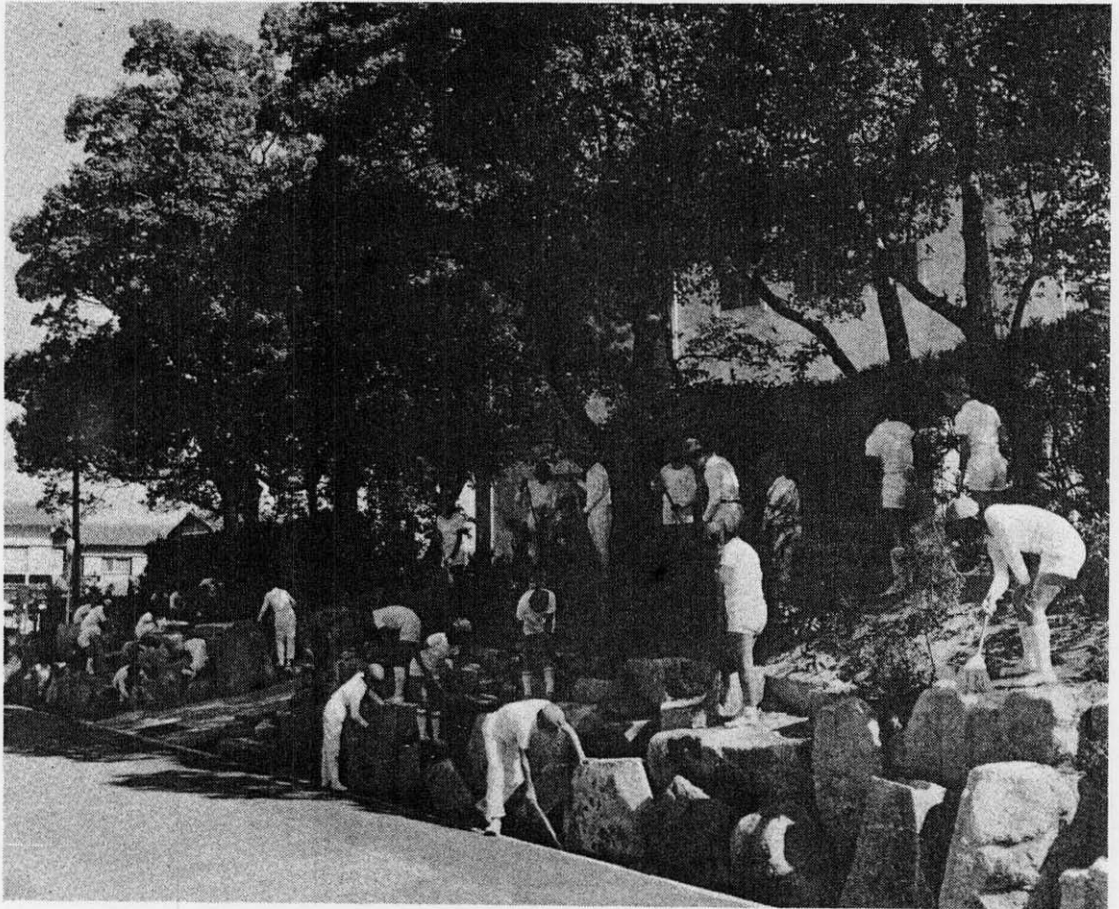
昭和51年11月1日

編集・発行

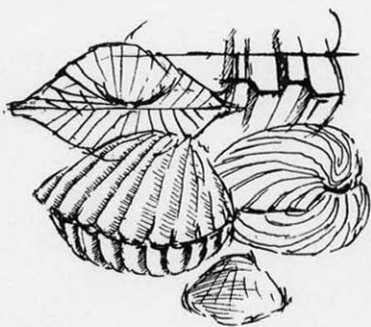
岡崎市教育委員会

大雨の水を
みんなのみこんでしまおう
運動場。
太陽が照りつける夏の日
木かげをくれた緑の大木、
今は、もう
赤、黄、茶色に衣がえ
風にさそわれ
道にさまよい
くねくねやってきた
木の葉たち
りっぱな
じゅうたんをしきつめる。
冷たい冬を
待っているような運動場。

六年 高橋佳子



(みどりの木かげで美化活動………広幡小)



還暦を 迎えて

上原 欽二

——教育随想——

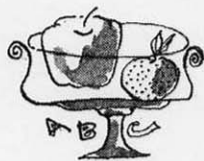
昨年還暦を迎えて私は又人生の出発点に戻りました。私は非常に健康体です。もと／＼酒は全然たしなみません。随ってパーやキャバレー、おでん屋等は自分から進んで出掛けることはありません。その上四十年間愛煙家を自負していた私が一昨年九月ふとした体験からぶつと煙草もやめました。二ヶ月間は苦しみましたが、それに堪えているうちに、胸のあたりのすが／＼しさに驚き、痰が出なくなつたのにも吃驚して禁煙をしてよかつたと思ひました。

とでした。芸術は教わるものではなく、体得するものだということを知つたからです。それから四十年余、駄馬に鞭打つて独学で勉強してきました。自然が私の師であると思つてやつていっているうちに、春陽会に所属すると春陽会の大先輩たちが皆、んで師になつて下さいました。有難いと思ひましたが、私は先輩の絵の真似はしませんでした。私には私なりに貧しくとも生れながらに私だけの世界があると思つていました。その後頑固に私は自分自身のものを追究しました。然し芸術の客観性を無視することは出来ません。苦しみの連続でした。そうして躍りあがる様な喜びが時としておとづれました。この生涯の勉強は還暦を迎えて又一年生に戻りました。又第一歩から写生によつて美の発見と創造に邁進するのです。その為には健康でなくてはなりません。私の健康管理は絶対にバランスとハーモニを守ることでした。従つて無理はし

ません。他人や世間の力に左右されることを徹底して避けます。だからゴルフ、マージャン等人を相手とする遊びは一切知りませんし、近づきません。ひとりであるときが絶対に自由で我儘一杯ふるまえるのです。写真道具一式をリュックにつめ込んで、私は山野を歩きまわります。好きなことだけに熱中して生きてゆける私は誰よりも幸せな人間だと思ひます。感謝の気持を忘れずにこれから先十年でも二十年でも猛烈に描けるだけ描きまくります。

私は先日の名古屋松坂屋の個展の挨拶文の中に、「いまでも長年ひまわりを描いてきましたが、還暦と同時にとうとうひまわりと心中することにしました。誰が何といおうと私は私自身を描くこと、私の生活を描くこと、私の思想を表現すること、それらすべてをひまわりをモチーフとして実現することにしました」ということを書きました。もう脇見はしません。道は自分で開拓するのです。洋々たる人生が又始まつたのです。

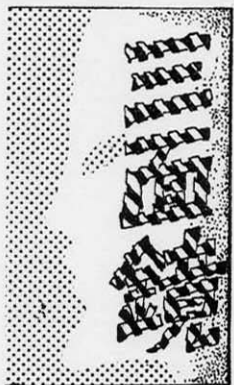
(春陽会会員)



職場に学ぶ

●先輩から多くのものを

野勢 明

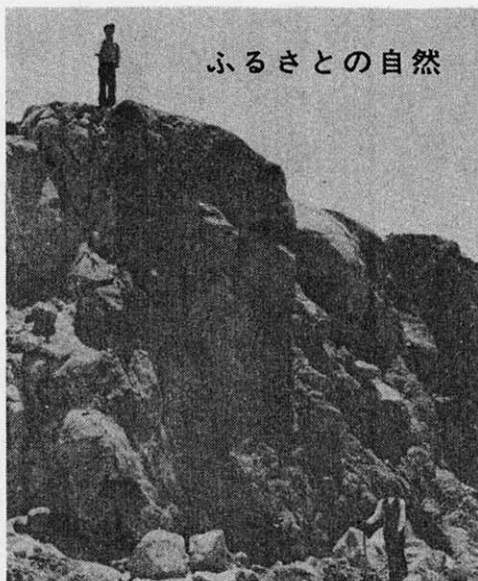


小規模校に赴任して三年目、今五年生十四人を受け持つている。一時間一時間の授業の中で疑問や迷いは、家庭的でまとも易い職員室で、お茶を呑みながらアドバイスを受ける。一学年一学級なので、学年会というものはないが、担任を持つている先輩の誰彼となく、教材の解釈や授業の進度を話し合うその中で、非常に参考になることがある。また、他学年の教室の横を通りながら掲示物や板書、学習形態、発言のさせ方など、取り入れることのあるものを求める。一人一学年、甘えてばかりいられないということが、自分にとって大きなプラスとなっている。

●迷路、明路

木山 登志子

三十七歳にして採用試験を受けた私。きのうは父兄、きょう教師。何はさて



地学的輪廻

—かこう岩とさば土—

が殻状にはがれやすくなつた部分。

風化していない岩石は、まだ、鉱物のイオン格子（結晶を構成する分子の配列状態）がしっかりしているが、地表面に露出すると水の媒介によって、まず、第一鉄が酸化されて酸化鉄や水酸化鉄に変わる。いわゆる、さびのついたような状態になるのである。これが風化段階1の花崗岩である。ハンマーでたたいてもびくともしなかつた花崗岩が、もういさば土になり始める最初の段階である。これに続いて、ナトリウム、カリウム、カルシウム、およびマグネシウムなどの金属イオンが溶け出し、または他のイオンと置き変わり、ついに、あれほど硬かつた花崗岩も、ハンマーなしで、手を触れるだけでバラバラと粒状に分解できるようになってしまふ。これが風化段階2、3のものである。

仏教の言葉に「輪廻」というのがある。生物が死んで別なものに生まれ変わる過程を永久に繰り返すことを意味しているが、岩石の世界にもこのような過程がある。地学的輪廻とでも言おうか。花崗岩を例にとれば、新鮮な岩石が、水や風などの力で風化し、やがてはさば土となり、さらに水に洗い流されて砂や泥になって水底に堆積し、あるいはさば土のまま長い年月を経て、堆積岩に生まれ変わる過程である。

真伝町から滝町にかけて、現在、宅地になっている所も、五・六年前までは盛んに造成作業が行なわれていた。新しい切割では、地表から漸次風化された部分に移り変っていく過程がよく観察できた。中には玉ねぎの皮のような構造で、芯の

部分に新鮮な部分の残っている岩塊が、さば土の中に点在する様子もよく見られたが、これが山中であれば、野づら石と呼ばれるものである。花崗岩には、特有名な割れ目（方状節理）があるが、この割れ目がこういう風化のし方を進めるのである。

● いろいろな風化の段階を次のように決め、実験室でそれぞれを化学分析すると風化の進行状況がよくわかる。

● 風化段階0 風化を全く受けていない新鮮な部分。

● 風化段階1 風化により黒雲母の周囲のみが茶褐色になった部分。

● 風化段階2 風化が進み岩石の表面が全体に茶褐色になった部分。

● 風化段階3 風化がさらに進み、岩石

● ところで、最近、竜美ヶ丘、滝、真伝、田口などの市内各所で大規模な土地造成が行なわれている。これらの造成地で観察すると、十数メートルの深さまで、風化している所も珍しくない。花崗岩の風化は早いという。（建造物や墓石の風化状態を見てもわかる。）しかし、ブルドーザーで切りくずされ、荒涼とした造成地に立って、厚いサバ土の崖をながめると、つくづく地表の変化のタイムスケールの悠久さを感じるのである。

（岩津小 大岡久芳）

おき生活の仕方がさっぱりわからない。廊下を歩けば子どもにもぶつかれる。ぶつかつた子どもが頭を下げてくれる。「木山さん。廊下は右側だよ。」「はあ?」職員室へ忘れものを取りに行く。ドギマギしているのをつい小走り。「木山さん。ストップ五十。」「はあ。」

あらゆる努力をしたのにさっぱりわからぬ子。たまらなく寂しく、くやしい。主任の先生に背中を押されて教室へ。「どうして五十点しかとれんの。ぐちが涙に変わる。「教育は指導技術じゃないんだよ。」「生活を見てやるのが大事だよ。」「いくら言われても頭に入らなかつた日々はや三年目。そのむずかしさをしみじみとかみしめる。」（大樹寺小）

● 学び多きに喜び

柴田 誠

玄関を入つたところの通路の右側の黒板に、毎週書き替えられる古今東西の名言。その反対側には「学而不厭」と湯川博士の言葉が掲げられている。これこそ無言の教えである。

また、職員室の雰囲気もいい。「新田次郎の「聖職の碑」引き込まれて読んだよ。よかつたら貸すよ。」「偏差値のしくみ、この本を読むとよくわかるな。」

これ等を耳にすると、あれも読んでみよう。また、これもと意欲をそそられる。どの先輩、同僚も素晴らしい力を持って私に迫ってくる。他の職種の職場の雰囲気は知る由もないが、専門職である教師の集団の中において、学び取ることの多きに喜びを覚える毎日である。（東海中）

郷土に
学ぶ

①



郷土に育った先人の歴史をひもとく学校。生活から生まれた先人の文化を学びとる学校。郷土の自然を護り、また、育てることに努めている学校等々。時代の波に消されようとしているものを、自らが学び、後世に残そうと活発な学習活動を続ける学校が多い。以下は、その一コマを紹介しよう。

見直す

"土地の歴史や

伝説を"

— 常磐中 —

米河内に「下馬地藏」の伝説がある。ある日、教室でその下馬地藏の話のことを尋ねたら、「知っている」と答えた生徒は一人としていなかった。生徒の四分の一は米河内である。家の人に尋ねてみることでその日は終わった。

翌日、米河内の生徒の数人が、家の人に話してもらったと報告した。

後日、父兄の一人からこんなことを聞いた。「子供に尋ねられて、久しぶりに思い出しながら話してやりました。ついでに戦中、戦後の生活ぶりも話してやりましたが、けっこう興味を持って聞いて

ましたよ。」

次は、ある生徒の作文の一部である。おじいさんのおじいさんの代に、ほくの家では今でいう食堂をやっていたそうです。そのころは、大沼から康生まで馬車で荷物を運んでいました。安戸からは坂が多くて、人も馬も疲れるので、ほとんどの人がぼくたちの町、安戸で休んで行ったそうです。床屋、食べ物屋が三軒、菜屋などがあり、その食べ物屋のうちの二軒にぼくの家が含まれていたのです。

安戸は、大沼と康生間の重要な所だったということがわかりました。

おじいさんの話から、この生徒は自分の家の歴史を知った。今は静かな自分の町の当時の華やかな歴史も知った。これから奥は山がちになるといふ地勢が実感として理解され、その当時の人々

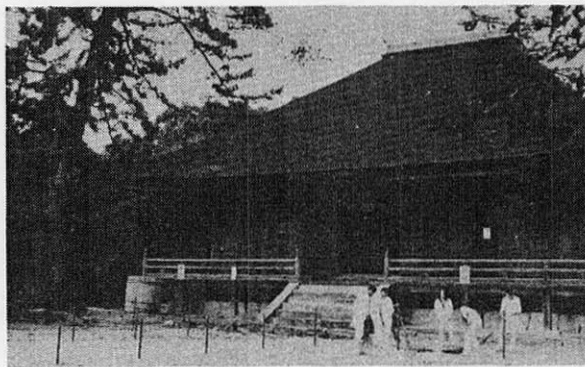
さぐる

"子どもの目で見て

郷土を"

— 福岡小 —

「早川さんの南のところに、ハスガイやツボなんかの貝塚があることを発見したよ。」「こんどのクラブはほつちへいかまいか。」「三善寺のおほりのあとみたいなおともついでに行きやすいじゃん。……」



の生活の一端も知ることができた。郷土や、父母と子供たちとを近づけ、結びつける場を、もっと多く設定することを考えてもいいのでは、と思う。

六年生の、リーダー格の子たちの相談の様子である。

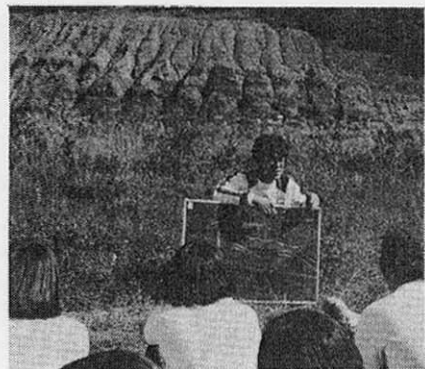
福岡小学校の郷土クラブは、六年生の歴史きちがい（自称）たちを中心にして総勢二十名、いまや、顧問の江端先生の手を離れた感がある。学区の史跡のことについて、目をかがやかせて次から次へと話してくれた。百年祭の二年前（今から六年前）百周年を機に学区を知ろうと発足した正課クラブの一つである。初めは先生につれられて学区の史跡を見てまわる程度であったが、今では、資料を足でかせぐことでは市内のどの先生にもひけをとらない顧問の江端先生ですら知らない事実や情報を持ちこむようになるまでに成長したということである。好きこそ物の何とか、この子たちの今後の成長が大いに期待される。



使 う

「郷土の自然を
学習の中に」

—東海中—



教科書の写真とはあまりにも
かけはなれた、不明瞭なしま模
様、これを使って生徒に地層を学習させ
て、どれだけ効果があるだろうか、それ
よりも映画かスライドを使って模式的な
地層を見せた方が、と何度迷ったか知
れない。しかし、実際現地に生徒を連れ
ていってみると、彼らの目の輝きは教室
とは全く異なり、「こんな身近に地層が
あったとは知らなかった」と柱状図づく
りに熱中してくれた。郷土学習のよさは、
何といってもこの「ほんものの味」じゃ
ないかなあ……。

東海中学校で今年現地で地層の学習を
指導した菅沼剛先生の弁を要約した。

残 す

「学区の「むかし」を
文集に」

—本宿小—



私たちの郷土学習は、本宿を学ぶこと
によって子どもの中に、本宿のイメージ
をふくらめ、ふるさとの心を育てようと
するもので、単元学習の発展として考え
ている。

郷土をとりまくいろいろな事象を具体
的にとらえるために、教師も子どもも、
自ら歩き、聞き、調査をするといった実



実践方法をとりいれ、その成果を文集「も
とじゆく」にまとめてきた。さいわい本
宿学区は、東海道の道すじに位置する古
い家並と、造成地に建つ近代的住宅とい
う新旧両面を併せそなえている。
本宿を学ぶことによって郷土の良さを
知り、明日の本宿を考える連帯感をもつ
た子を育てていこうと願っている。

常夜燈

本宿の常夜燈は、秋葉神社の常夜燈で
す。秋葉神社は今は神明社のけいだいに
ありますが、もとは丸山にほこらがあつ
たのです。だから村の人が、いちいち丸
山の上の神社へおまいりに行くかわりに
常夜燈にあかりをあげておまいりをした
そうです。

村の人が「ご神燈」と書いたはこがま
わつてくると当番であかりをあげにいき
ました。わたしのおかあさんが、およめ
にきてからも、うちへ三回ぐらい当番が
回ってきたそうです。いつのまにかその
はこが回ってこなくなりました。いつ、
どこで、どうしてまわらなくなったのか
家の人はいずれも知りません。

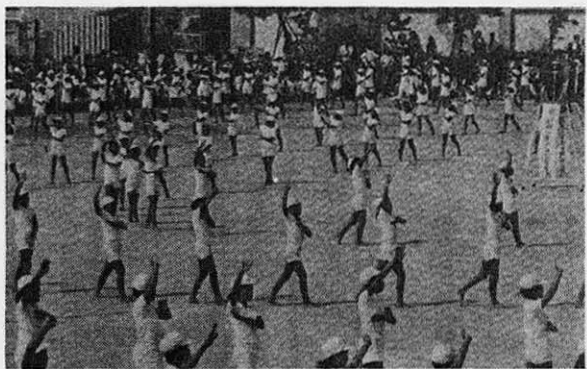
(文集「もとじゆく」第八号より)

伝える

「ほたる音頭」に
昔を偲んで

—美合小—

竜泉寺川・山綱川と大平川（
乙川）の合流地点が源氏蛸（生
田蛸）発生の地といわれる。山綱川にか



かる、旧東海道の高橋のたもとには、芭
蕉の句「草の葉を落つるより飛ぶほたる
かな」の句碑が残っている。

戦後、美合駅前で盛大におこなわれて
いた「ほたる祭」で踊られた「ほたる音
頭」も、打ち寄せる時代の波で今はもう
踊る姿は見られなくなった。

市街地化とともに山奥に追いやられて
しまった蛸を、せめて町の子たちの心の
中に呼びもどそう、そして、その子たち
の手で美合に清流をとりもどし、蛸のと
び交う町に、と、校歌の中に「生田蛸
を友として」と歌い込んでいる。一方、
毎年の運動会では、全校で「ほたる音頭」
を踊りついでるのである。

美術教育に思う

岩津中 杉浦正明

「起立」「札」何度となくくりかえされるこの一瞬——生徒のはりつめた視線、「やるぞ」と授業に臨むこの心の緊張が私は好きだ。授業を終え、作品を大切にしようとしてがやがやと教室を出ていく姿を見るのも好きだ。

美術教師として、「作品の中に力を出しきっている姿」「自分の意志で納得のいくまで追求している姿」を見る時ほど、喜びを感じる時はない。自分なりにとらえたものをもとにして極限まで制作にいとませ、個を出しきらせることが美術科のねらいでもあり、教師の役割でもあると思うからである。が、ともすると時間の制約から作品の完成を急いだり、結果を期待するあまり、個々の生徒の感覚や表現力を押しつぶしている一面がありはしないかと反省するこの頃である。

今、文化祭をめざしての制作に余念がない。のみをたたく槌の音が響き、絵筆を走らす真剣な姿がある。放課時にも、制作途上の作品やスケッチブックを持って相談に来る生徒も多くなってきた。そんな時、「まだ、だ

めだ。もう一度考えてみなさい。」

と、その過程への取り組みを讀みとつてやる余裕をもたず、簡単につき放してしまふ事が多い。

入学して間もない生徒が「嫌いな教科が好きになりそうだ。」とつぶやいた言葉をもう一度自分自身にかみしめてみたい。

個々の発想を大切にしつつ、

認めてやる姿勢が必要だと思つてきた。

一方、美術クラブも活気がでてきた。「この色の調子はどうかしら」「その笛を持つ手の感じがでていないね」瞳を輝かせ意見交換も活発に行われる。

日常の接触の中でつくられた安心感と一つの目標へ向かう創造への緊張感がそこにある。

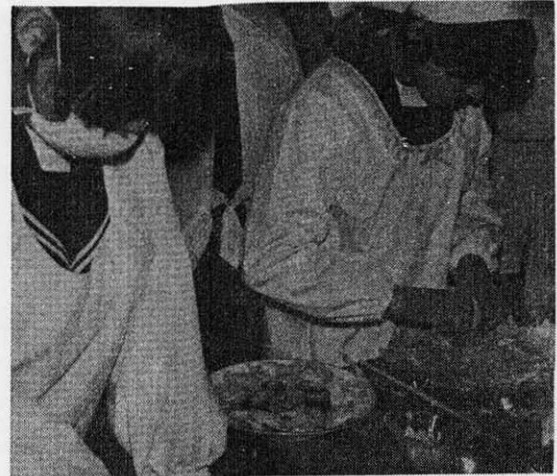
「ごろうさん」「さようなら」満足気なはずんだ声がうす暗くなった廊下に響く。

生徒らのぬくもりの残った教室で我にかえり一日をふりかえる。このひとときが、あすのエネルギーだ。生徒たちになげない若さと、道のない所に道をひらく情熱を美術教師として持ち続けたものだと思ふ。

刈りとられた稲田に、また、日が落ちる。

教育日々

手づくりの味



甲山中 蜂須賀千代子

「紅生姜の色がついてとれやへんよ。」

「なぜこんなに赤い色をしているの。」

「新聞に出ていた人工着色料なんだよ。」

「これが?……。」

疑問についてのこんな会話を耳にした時、へそうだ、興味を持ったこの時に、食品添加物による食品工業の発達に目を向けさせよう。〜と思いついた。

係の分担など、嬉々として相談がすすんだ。

いよいよ母の味のする献立の実習、今まで積極的でなかった生徒も、分担された仕事を真剣にやりとげようとしている姿に、思わず目を見張り、ほっとした私である。

「自分たちの作ったクッキーは見た目は悪いが、おいしくできた。まごころこめて作る愛情のたまものである。手作りのものの方が、食物を粗末にしないような気がする。」…… K子

「加工食品と手作りのものの比較を勉強して、私は、調理実習そのものの学習も大切だが、人工着色料とか、食品添加物等の学習も、私たちの生活に結びついた、生きた勉強であることに気がついた。」…… M子

このような生徒の声から、私は、常日頃の調理実習を、時間不足等の理由から、安易なものにしていることを深く反省させられた。

ひとりひとりの生徒が興味を持って、自主的に学習できるよ、生徒の実態、社会情勢、そして郷土の特色等を生かし、楽しいものにして行きたい。そして手作りの味とともに、豊かな心を育てたいと思うのである。



お知らせ

第四回教育文化賞決まる

授賞式記念講演に 山岡 莊八氏

第四回の教育文化賞受賞者に個人三氏と二団体が決まり、十一月七日午後岡崎勤労会館で授賞式が盛大に行なわれた。

当日は、ビデオでの業績披露のあと市教委、竜城ライオンズクラブ（水藤範義会長）からそれぞれ賞状、賞金が贈られた。

引き続き、作家山岡莊八氏の記念講演「家康公三百年祭にあたり」を聞いた。受賞者は次のとおり。

【個人】▽後藤和彦氏（葵中教諭）▽クラブ活動・合唱指導における数々のすぐれた業績▽新行和子氏（明大寺町、主婦）▽「中根家文書」などの郷土史料研究の成果▽磯貝一夫氏（市総合福祉センター職員）▽特殊教育十七年間の献身的な実践活動。

【寄贈刊行物・資料等】
◇映に生きる人 恵田小学校学区民、児童、職員みんなで書いた地域の歴史と伝承の記録 古老の昔話が貴重。B6変形。
◇藤川小の教育① 藤川小学校図書館活動、教師の読書記録を中心とした現職研究誌。A5

（代表岩月栄治連尺小校長）
郷土読本「岡崎」、「岡崎の歴史」など郷土資料編集刊行の成果▽デンガンガッサリ保存会（代表、舞木町梅村要氏）
郷土の民俗芸能デンガンガッサリの継承保存の活動。
■細川小研究発表会 12月7日
▽主題「自ら調べ、磨き合い、生きる学習の建設（国語）」
▽内容「公開授業（基礎、読解）分科会協議、発表、講演（富山市立堀川小教頭飯田敏雄先生）」
■相次いで受賞、入賞校
▽学校環境緑化コンクール県特選
▽連尺小▽健康優良学校全国特選
▽連尺小▽花いっぱい優良校コンクール毎日新聞社賞
▽川小▽全国保健体育優良校
▽岩津小▽県保健活動優良校準一
▽香山中▽秋のFBC特選
▽葵中

昭和51年度秋季小中学校各種競技記録

第9回岡崎市中学校新人総合体育大会成績

10月24日～31日

種目	性	順位		
		1位	2位	3位
陸上競技	男	矢作	甲山	城北
	女	六ツ美	城北	甲山
軟式テニス	男	甲山	福岡	常磐・香山
	女	矢作	東海	甲山・河合
剣道	男	常磐	城北	矢作・六ツ美
	女	葵	竜海	福岡・矢作
バレーボール	男	矢作	岩津	甲山・美川
	女	葵	南	竜海・甲山
卓球	男	東海	南	六ツ美・城北
	女	矢作	竜海	葵・岩津
体操競技	男	葵	甲山	東海
	女	南	矢作	葵
ハンドボール	男	六ツ美	美川	城北・葵
	女	六ツ美	美川	葵・岩津
柔道		2年の部 1位 美川・2位 竜海 1年の部 1位 竜海・2位 美川		
ソフトボール		甲山	城北	葵・矢作
野球		葵	矢作	福岡・美川
バスケットボール	男	葵	矢作	竜海・六ツ美
	女	甲山	美川	常磐・矢作

第15回小学校陸上競技大会 10月31日公園グラウンド

種目	優勝	2位	3位
男子総合	広幡	矢作西	梅園
女子総合	三島	矢作東	連尺

陸上競技個人記録（中学校）

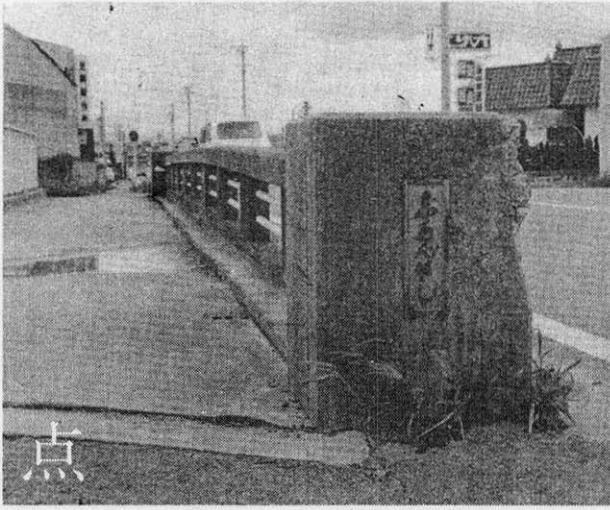
10月24日六名公園グラウンド

種目	男			女		
	氏名	校名	記録	氏名	校名	記録
100M	遠藤真弘	矢作	11' 7(新)	鈴木 由佳	六ツ美	13' 4
200M	田代和久	甲山	24' 4(新)	竹内 晶子	葵	27' 9(新)
800M	三浦浩司	城北	2' 13' 7(新)			
3000M	兼子 薫	甲山	9' 58" 0			
80MH				杉浦小百合	六ツ美	13' 4
100MH	田畑幸夫	竜海	14' 6(新)			
400MR				城 北		55' 4
800MR		葵	1' 42' 8(新)			
走幅跳	齊藤尚史	矢作	5 M55	山本 美代	甲山	4 M57
走高跳	加納啓行	甲山	1 M60	山方 京子	常磐	1 M35
砲丸投	宮嶋幸男	香山	12M65	青山 富美	福岡	10M13

個人記録（小学校）

種目	男			女		
	氏名	校名	記録	氏名	校名	記録
100M	青木幹典	広幡	13' 3	山本 香保	三島	14' 1
1000M	松本 久	梅園	3' 18' 7			
60MH	鈴木伸久	矢作西	8' 9(新)	速水 礼子	六ツ美	10' 4
400MR	広 幡		56' 6	三 島		60' 6
低400MR	連 尺		63' 3	三 島		67' 3
走幅跳	近藤量洋	根石	4 M78	片岡 昌子	三島	4 M12
走高跳	片岡達宏	井田	1 M36	高須久美子	美合	1 M34(新)
ソフトボール投	宮川正三	細川	62 M41	宇佐美智里	緑 丘	49 M04

所在地 岡崎市国正町



● カット 美川中 中山秀文

思案橋

西尾街道、国正町地内にかかる橋である。このあたりは、占部四郷と呼ばれ、昔は晴天が続けば雨水だけが頼りの天水場であった。

慶長三年、正名の野本新十郎と中村の渡辺弥蔵によつて、五年の歳月を費した占部用水が開削されて、水の不安は解消した。ところが、私財を傾け尽した二人の生活は破壊され、一家は

離散した。二人の気持ちを察した地元民は、占部川にかかる国正町地内の橋を、誰言うとなく「思案橋」と呼ぶようになった。一方、俗説によれば、藤川と岡崎への分岐点に近いので、西尾方面からの旅人や一夜の遊興を求めた若者が、右するか左するか、橋上でしばし思案したところから付けられたと伝える。明暗とを分ける伝えであるが、二人の遺徳をしのぶ「水恩忌」が営まれ、占部天神社に祀られていることは事実である。

この本を

- | | |
|--------------|---------|
| ○失われた教育 | 清水幾太郎 |
| 二玄社 | ¥ 750 |
| ○日本文化を問いなおす | 渡部昇一 |
| 講談社 | ¥ 980 |
| ○教育と社会の間 | 清水義弘 |
| 東大出版会 | ¥ 580 |
| ○猿の腰かけ | 山本健吉 |
| 集英社 | ¥ 1,500 |
| ○三河古道と鎌倉街道 | 武田 勇 |
| 桃山書房 | ¥ 1,600 |
| ○かけがえのないこの自分 | 遠山 啓 |
| 太郎次郎社 | ¥ 870 |
| ○落穂拾いの記 | 内藤 濯 |
| 岩波書店 | ¥ 1,200 |
| ○卓池雑考 | 鈴木煙浪 |
| 三河発行所 | ¥ 2,300 |
| ○ことばの意味 | 武田 武 |
| 平凡社選書 | ¥ 940 |
| ○岡崎地方史話 | 鈴木重一 |
| 東海新聞社 | ¥ 1,500 |

ごけむし

け蹴ちらしてまばゆき銀杏落葉かな
少年は掬つては投げ、少女は喜々として
黄金色を掌に受ける。十一月のみずみ
ずしさの中に生きる。
美への憧憬と愛着は、心の豊かさを育
てる。季節がもたらす自然美を、校庭の
一隅に尋ねるのも「環境から学ぶ」
一刻ではなからうか。

「剛骨虚心」これは碁の達人の好
まれることばだそうである。剛骨とは
骨太でがっしりとしていて、心が強い。
つまり絶対に強いという気構えである。
しかし、それだけでは勝てない。その上
に虚心で平静でなければ、だめだとい
うことである。碁の達人にあらずとも、深
くかみしめ、味わいたい語である。

し「書を校すること、塵を掃うが如し」、
職業柄、ずい分と書の校正に接する。
数度のくり返しの後、自信を持って「よ
し」としても、刊行の晩には、誤字脱字
が指摘される。赤面と恐縮の至りである。
「塵を掃うが如し」であるが、これを
戒のことばとして、慎重の上にも慎
重を期したいものである。

むかしのことを知ろう。郷土に学
ぶ子ども達。教科書・指導書にたよ
つて、足下の、珠玉のような教材を見落
しがちの我々に、市制六〇周年、家康公
三六〇周年のことは、非常によい教訓
を残してくれた。教師自らが学ぶ。自分
らの手で掘り出し、琢く教材が、子ども
たちにとればど生きて身につくか……。